

QSK にぬふあぶし

No.304

ね
子の方向の星(北極星)



読谷村家族会が沖縄タイムスの取材を受けました

コロナによって、家族会活動もさまざまに変化を始めています。

読谷村精神療養者家族会では、沖縄タイムスの助成金事業を使ってノートパソコンを購入しました。

各種の研修会もいまはオンライン配信が主流になっています。以前は県外研修といえば、特に沖縄にいと旅費やスケジュールの心配が先立ちましたが、インターネットの活用により、いながらにしてさまざまな情報に触れられるようになったことは、活動の可能性を大きく広げるものと感じます。これまでになかったようなつながりを得ることも、きっとできるのではないのでしょうか。



オンラインで県外研修

約30年前に発足した読谷村精神療養者家族会(富山幸子会長)は現在、会員が約20人。毎月の定例会やイベントなどを通して交流を深めている。

助成金で購入したパソコンを使い、3月は宮崎県で開かれた精神保健福祉研修会に会員4人がオンラインで参加。「定例会の資料作成などでも使い、助かっている」と富山会長は話す。

毎月第2木曜に開く定例会で、今後のイベントや互

読谷村精神療養者家族会

いの近況を確認する。月に1回、計5回に分けて毎年実施している学習会では、心の病や家族の向き合い方などを学び合う。会員以外も参加でき、正しい理解や新会員加入のきっかけの場となっている。

富山会長は「家族が孤独にならないようにつながっていききたい。悩んでいる人に一人でも多く会員になってもらい、仲良く、楽しく、元気にやっていきたい」と語った。
(中部報道部・伊集竜太郎)

助成金でパソコンを購入した読谷村精神療養者家族会の会員の14日、同村社会福祉協議会

沖縄タイムス 2022年4月28日(木)

第47回 部落解放・人権西日本夏期講座のご案内

日時：6月9日(木) 12:30~16:50 / 6月10日(金) 9:30~12:30

会場：オンライン ZOOM

(※那覇文化芸術劇場を予定していましたが、変更になりました)

9日 講演1「基地から漏れ出す PFAS 沖縄で放置される環境汚染」
講演2「沖縄で考えるジェンダー平等」

10日 講演A1「沖縄戦の遺骨収集「ガマフヤー」が伝えたいこと」
講演A2「尊厳ある医療環境を求めて～精神障害者、高齢者の社会的入院を問う」
講演B1「人権教育・啓発の進め方～学校・地域を中心に」
講演B2「差別解消・被差別連帯の道のり一部落問題入門」

お問い合わせ先 (一社) 部落解放・人権研究所 部落解放・人権西日本夏期講座事務局

TEL06-6581-8576 FAX06-6581-8540 メール nishinatsu@blhrii.org



沖縄のロウヤ ～森奥からの慟哭と残像～

いつもの授業では見せることの少ない真剣な表情で、話に集中して耳を傾けている学生達が眼前にいる。

初夏を思わせる気温と時折小雨が交じる中で訪れた「監置小屋」について、精神保健福祉士養成科目の授業で紹介した。

ひとけの人気のない老朽化した母屋、隣接するコンクリートブロックの小屋、その屋根に生える大きなシュロ等の草木、薄暗く湿った内部、土床に人一人身を横たえられる狭きょうしょう小さ、壊れた鍵、食事を差し入れる小さな窓や排泄のための穴。小屋の前に立ったとき、最初は金縛りにあったように身体が動かなかった。案内して下さった人や同行した人と言葉を交わしていくうちにゆっくりと、沈鬱ちんうつで深い悲しみの漂う現実が迫ってきた。木立から時折聞えてくる鳥の声が、閉じ込めた人と閉じ込められた人の落涙らくるいのささやきにも変わっていくようだった。

刺激がやんだ今も残る感覚の興奮をどのように表現し、精神保健福祉を学ぶ学生にどうやって伝え感じてもらったらよいのか、うまく言葉をみつけられないまま、体験や感じたことを率直に語ってみた。

学生は既に他の授業でも、精神医学史や法律の変遷へんせん、私宅監置くれしゅうぞう、呉秀三などについて学んでいたが、実在する小屋に監置されていた人の思いを想像したり、周辺へんの苦しみや痛みを考えたりすることなどはこれまでなかった。沖縄の精神科医療・保健福祉の歴史、精神障がい者の排除、本土よりも長く疎外された状況は過去の問題ではなく、今に続く「現在の問題」として捉えながら、グループワークの中で共有し、それぞれが精神保健福祉士としての自分の立場や役割等を考えていた。

今回の機会を得て、戦後が長かった沖縄には、日本の精神科医療・保健福祉の課題ぎょうしゆくが凝縮されて横たわっている現実があること、単に病床が削減されて地域生活支援が主流となればよいのではなく、人が孤立しないための仕組みや差別・偏見のない社会の必要性をあらためて感じ、今後の自身の実践にいかしてゆきたい。

北星学園大学 社会福祉学部 望月和代

監置小屋の視察見学を行なった皆様から、感想のご寄稿をいただいています。
関心をお寄せいただき、また言葉を残していただき、ありがとうございます。

監置小屋

題名すら、「監置小屋『に行って』」、「監置小屋『を見て』」のどれも適切ではないと感じたため、名詞だけにしました。「監置小屋」は現実であるため、監置小屋とします。

監置小屋に人を閉じ込める制度(私宅監置)は国が作って保健所や警察が管轄した公的な隔離制度ですが、親やきょうだい^{かんかつ}が監護義務者になります。今回、現地で私が感じたことは、監護義務者となった親やきょうだい、監置されている人たちの状況を見て回ることが業務だった保健所の職員、近所の住民等の関わった人は全て、自分が知っている人を閉じ込めていることはやりたくないことであっただろう、そして、閉じ込められた人は、両親やきょうだい達が団らんしている声が聞こえるところで、一人何を思ったのだろうということでした。

ほかに、この監置小屋は過去のことと切り切れるものではないと思いました。現在では、「閉じ込める」は精神保健福祉法でいうと、第36条に「行動の制限」として、精神保健指定医が必要と認めれば行うことができます。小屋がきれいな病院や施設の建物になっただけで、「保護」、「安全」、「医療上必要」という理由で行動の制限はたくさん存在しているし、私自身、閉じ込めることと閉じ込められることを「仕方ない」と思っていたということも気付きました。



法律でできることであっても、監置小屋のような悲しい、辛いことは少しでもない方が良いです。結局、今回、いろいろ考えさせられましたが、自分にできることは、過去を忘れず、未来を信じて、自分自身の希望ではない場所、方針、方法等を選ぶ人(クライアント、家族、近隣住民、支援する人も含めて)が少なくなるように、自分は自分の仕事をするしかないと再確認しました。



ミニ菜園の食材を楽しもう♪

From 宮古

こんにちは！ふれあいプラザからのお便りです。

プラザの敷地内には幅1メートルほどの狭い『畑』があるのですが、ここには一年中何かの野菜が植えられています。ほとんどが頂き物の野菜から取った種や、誰かが持ってきた苗など。現在ニラ・ナス・ニガナ・ピーマン・パパイヤが実っており、キャベツとヘチマ・ゴーヤーが生育中。主に週末の活動で『畑しごと』として手入れをしています。メンバーの中にはかわいい苗が成長しやすいようにと、自宅から”マイドリル”を持参し、ネット取り付け工事する人も！



4月の調理活動では、立派に育った米ナスとバジル

を使った『ガパオライス』に、パパイヤしりしりの付け合わせ。

みんなで手入れした新鮮な野菜を使っているので、調理しながら「こんなに大きくなったの〜!」「いい香りね〜!」と気分も高まります。この日は畑で育ったレモングラスのハーブティーも淹れてアジアなランチとなりました。



2月に植えたキャベツは、毎日観察しているみんなのアイドル。青虫の季節が過ぎたらカタツムリに狙われ、なかなか苦戦しています。このキャベツを使って『お好み焼き』の調理を予定していましたが、日照不足で小さい玉しか間に合いませんでした！（来月別のメニューでいただきます〜）予定通りいかないのも楽しみながらゆるゆる楽しむ畑なのでした。 ふれあいプラザ宮古

新米事務局長
日記



あるく

かねて自分自身のことをインドア人間だと思い込んでいたのだけれど、“不要不急”の外出がはばかれるようになると、休みの日に家でじっとしていることもそれはそれで我慢のならないタイプであることがわかった。「苦手」というレベルではなく、「我慢ができない」のである。

これは個人の問題ではなく、生き物としての人間の性質のように思われる。というのも、たとえばロックダウン下のイタリアでは外出の口実を得るために、各地で犬の貸し借りが行なわれたという。こう書かれている——“犬の散歩は「必要性のある状況」だと認められていたので、外出するためには犬を貸してもらわなければならない。(中略) なかには、犬のぬいぐるみに鎖をつけて散歩した例や、にわとりに鎖をつけて散歩させた例もあった”。(松嶋健『イタリアにおける医療崩壊と精神保健』より)

犬も人ももともとほっつき歩くようにできていて、そういう自由がなくなると、精神衛生的にはだいぶよろしくないと感じるし、実体験に照らしても身体にだってあちこち不具合が生じてくる。

幸い、日本ではにわとりがいなくても散歩できるので、ときどき相談に来るヘルパー講座の卒業生と一緒に南風原の町を歩くようになって、もうずいぶん長い。所要時間30分くらいのルートはだいたい固定で決まっており、あまりクルマの多くない静かな道を、季節の花や庭木など眺めながら散歩する。困りごとや近況報告を聞いて、自分なりに感じたことを伝える。

たいてい、「大丈夫ですかねえ」「大丈夫よ」という程度のやりとりだけなのだが、散歩のおかげかどうか、この彼もヘルパー事業所で勤続4年目に入ることができて、最近は以前ほど深刻に悩むことが少ない気がする。

それでこの散歩を始めた直接のきっかけには、かばさわしおん樺沢紫苑という精神科医のユーチューブチャンネルがあって、この“カバちゃん先生”がしきりに「睡眠・運動・朝散歩」を勧めてくるのでついその気になってしまったのだった。本当は、起きてすぐの「朝散歩」



(YouTube『樺ちゃんネル』)

がいちばんいいと思うのだけれど、朝に時間を作るとなるとやっぱりなかなか難しく、せめて昼間に歩くようにしている。一人だと億劫なことも仲間がいると続けやすい。

歩く欲求に関して言うと、スペインの巡礼路^{じゅんれい}を徒歩で230キロメートル辿った親戚の夫婦がいる。スペインを横断するこの道はぜんぶで800キロ近くあって(ちなみに沖縄本島の南北端は直線距離で約106.6キロ)、時をあらためてまた続きを歩くつもりでいたら、コロナの世になってしまったのだった。ただただ歩くだけのこの旅がキリスト教圏の人にかぎらず人気だそうで、そう言われると一生に一度くらいは歩いてみたいような気もしてくる。ひたすら歩いているあいだは「もううんざり」と思っても、歩かない日常に戻ってくるとすぐにでも「また歩きたい」とうずうずしてくるそうだ。

この「ただ歩く」ということが人間にとっていかなる意味を持っているのかというと、実はいちばんには「意味を手放すという意味」があるのではないかと少々ひねくれたことを思っている。無為徒食^{むいとしよく}という言葉が端的に示すように、「ただ生きる」ということがひどく苦手で、目的や意味を絶えず探しがちな我々なのだが、立ち止まってみて、人生で本当に幸せな時間というのを考えてみると、「ただ食べる」とか「ただ眠る」とか「ただ歌う」とか、つかのま、意味と切り離されるそういう時間に帰着しはしないだろうか。

逆に言うと、幸せでない時間は、成果やら生産性やら意味づけに追い回されているときであって、それはどう考えても人生の本質とは無縁のものに思えるのだけれど、無為徒食^{むいとしよく}の烙印^{らくいん}を押されないためには、世のなかに多々あるそうした意味のない意味づけの社会活動に参画しなければならず、おおむねそのために汗を流す日々である。(増山)

◎編集後記◎

沖縄は例年よりも早く梅雨入りし、只今、梅雨真ただ中！
皆さんいかがお過ごしですか？

私は、梅雨時期と言えはの
【よへなあじさい園】へ行ってきました。30万輪のお花に癒されましたよ。 奈

編集：公益社団法人 沖縄県精神保健福祉会
会長 山田 圭吾
〒901-1104
沖縄県島尻郡南風原町字宮平 206-1
てるしのワークセンター内
電話 098-889-4011 FAX098-888-5655
E-mail terushino@castle.ocn.ne.jp
発行：九州障害者定期刊行物協会
〒812-0044
福岡市博多区千代 4-29-24 三原第3ビル 3F
電話 092-753-9722 FAX092-753-9723
定価：10円(会費に含まれる)